

道徳 ジャーナル

- 21世紀 心の時代に
生きてこそある喜び～すべての動物に幸せを～
甲斐尚子……………1
- 道徳授業 私の実践
・伝記教材を「比較」と「問い返し」で深める
高木信俊……………4
・本音を引き出し、対話で深める授業
～ICT活用のメリットによって～
内藤大輔……………6
- 浅見先生に相談です！
「考え、議論する」道徳とは？
浅見哲也……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

21世紀
心の時代に

生きてこそある喜び

すべての動物に幸せを

山奥にある「動物の孤児院」

大阪府豊能郡の山奥、広い敷地に、「動物の孤児院」があります。私が一九九〇年に立ち上げた動物の保護施設です。

現在、ここで暮らしている犬や猫は約六百七十匹。人が飼いきれなくなって放置されていたり、施設の前に捨てられていたり、自然災害だったり、保護した事情はさまざまです。

保護する犬や猫は、平均すると、ひと月に二十匹くらい。保護の必要があれば、全国どこへでも行きます。「大変でしょう」と言われるときもあります。そんなことはありません。保護しなければ、動物は死んでしまう。一匹でも多く命を救いたい、という思いで足を運びます。

阪神淡路大震災、東日本大震災発生の際は、現地



公益財団法人日本アニマルトラスト 代表理事

かいしょうこ
甲斐尚子

に出向いて動物を保護してきました。昨年一月の能登半島地震のときも、状況を見定めながら保護活動をしました。

病気やケガをしていれば治療をし、犬や猫の状態によって部屋を分けます。食事も健康状態などに合わせたメニューを作って、どれだけ食べたかを記録。元気になる、新しい家族になってくれる里親を探します。

大勢のスタッフが毎日愛情を持って、動物たちと向き合う。そんな施設なのです。

動物たちの家をつくろう！

この施設を立ち上げることになったきっかけには、私自身のつらい体験があります。

一九八〇年のことでした。夫が入院していた病院に、一匹のカラフト犬がいました。名前はクロとい

って、とても賢く、患者さんたちから、かわいがられていました。私は夫の退院後も様子を見に行くほどでした。

あるとき、クロが保健所に引き取られると聞き、私はクロを我が家で飼いたいと申し出たのです。子どもがいるから動物好きだった私は、捨てられた子犬を連れて帰っては「家では飼えない。戻しておいで」と言われていました。そのため私には、大人になつたらこうした動物を助きたい、という思いがあったのです。

クロとの暮らしは、とても楽しいものでした。でも数年が過ぎたある日、散歩の途中で少し目を離した際に、事故で亡くしてしまつたのです。私はつらくてたまらず、それからより一層、捨て犬や捨て猫をほうっておけなくなりました。クロのぶんも幸せにしてあげたい。そんな思いで保護していくうちに、猫が六十二匹、犬が六匹になっていました。

家で飼うのには限界があります。どこかに、たくさん動物を飼える広い土地はないだろうかと探したところ、豊能郡能勢町の山奥に土地を持つていた方が事情を知って、貸してくれることになりました。私は土地を借り、多くの犬や猫が暮らせるような小屋を建てました。「動物の孤児院 ハッピーハウス」の誕生です。

最初はエサ代を賄うために会社に通いながら、手伝ってくれる人たちと動物の世話をしていました。しかし連れてこられる動物が増えて、人手が足りま

せん。私は会社を辞めて、動物保護団体の認定を受け、本格的な活動に専念することになりました。

その後、二〇〇四年に認定NPO法人日本アニマルトラストを発足。二〇一五年には公益財団法人となりしました。



緑豊かな場所で、700匹近くの犬や猫たちが暮らしている

決して死なせたくない！

動物が増え、スタッフも増え、毎日大忙し。時には、病気やケガでひどい状態の犬や猫を保護することもあります。

かつて、赤ちゃんがおなかにいるからという理由

で、瀬戸内海の小さな島に捨てられた犬がいました。

その犬は、毎日エサをもらうため、島から岡山の港まで泳いでくるのです。そのうち島で子犬を産むと、ある動物愛護団体が、子犬たちを引き取って安楽死（医療措置等で死に至らせること）させるつもりだと聞きました。そのような考え方があることは、私も知っています。でも納得できず、私はその団体より先に島に行き、犬の親子を保護しました。

子犬のうち、一匹は前足が不自由でした。獣医にも安楽死を勧められましたが、どうしても「はい」とは言えません。母犬が海を渡つてまでエサを求め、必死につないできた命なのです。簡単に諦めることはできません。

「安楽死だけはためです。どうか助かるように治療をお願いします」と必死で頼みました。その結果、子犬は生き延びることができました。そして、いい飼い主に恵まれ、一緒にベッドで眠るような幸せな生活を送れるようになったのです。

足が四本とも折れた子犬を保護したときも、獣医から安楽死を勧められましたが、諦めませんでした。手術で足を一本切りましたが、その子犬も新しい飼い主と出会うことができました。

どちらも、もしあのとき救うことを諦めていたら、決してなかった出会いと幸福なのです。生きてさえいれば、必ず楽しいことや幸せなことがあると、私は信じています。だからこそ安易に命を奪う決定はせず、まずは一人一人が命の重さに向き合う必要

があるのではないだろうか。そもそも、人間の都合で無責任に捨てられた犬や猫たちなのです。

介護の部屋フィガロハウス

一方で最近では医療も進み、ペットの寿命も延びました。すると、設立当初は想像もなかった問題が出てきました。犬が高齢で衰える、飼い主が高齢で世話ができなくなる、というペットの介護問題です。

そこで、老犬の介護のための部屋「フィガロハウス」をつくりました。衰えてほぼ寝たきりになってしまった犬のために、「フィガロハウス」専属スタッフがおむつを換えたり、寝返りをさせたり、口までエサを運んで食べさせたりします。

寿命を全うする日まで、毎日を気持ちよく過ごしてほしい。そんな思いでケアやりハビリをしていると、体力が戻り、自力で動けるようになる犬もいます。

そして、「フィガロハウス」から何匹もの犬が、あらたに里親のところにもらわれていきました。介護の必要な老犬を「せび、我が家でお世話をしたい」と申し出てくださる方がいるのです。そつした出雲いも、生きていればこそその幸せです。

動物を愛する人たちの思いやご支援に支えられて、活動を続けることができます。



老犬たちが穏やかに過ごすフィガロハウス

未来へ向けて

私たちは、施設の犬や猫を連れて、小学校や中学校へ講演に行っています。

子どもたちは動物に興味津々。少し怖がりながらも、スタッフの声かけで犬や猫をなでると、自然と笑顔があふれます。ふだんはなかなか自分の意見を言えないというお子さんも、自分が感じたことを積極的に話してくれます。

私は、生き物の世話をすることは何よりも子ども自身の心を育てるのではないかと思っています。

ごはんやトイレの世話をしながら、一緒に過ごし、生き物の気持ちを想像することで、思いやりの心や命の重さを知ることができます。悲しいときに動物をなでたり、話しかけたりして、人間が励まされ

れることもあるでしょう。

私子どもたちにもいつも伝えているのは「自分がされて嫌なことは、人にも動物にもしない。自分がされたらうれしいことをしてあげよう」ということです。大切なのは、愛情を持って誠実に接すること。これは、人と動物だけでなく、子どもに関わる大人たちにも言えるのではないだろうか。

この活動を始めて、三十五年になろうとしています。「世界一の動物愛護」を目標に、挑戦や改善を重ねてきました。今では、飼育班、募金班、訓練班、病院班、事務、広報など、それぞれの役割をスタッフがしっかり果たしています。若いスタッフたちが頑張る姿には希望を感じます。

「生きとし生けるもの、命の重さはみな同じ」この思いが、未来を生きる次の世代へとつながっていくよう、心から願っています。



「すべての動物に幸せを」が私たちの願い

(取材・文／古藤ゆず)

道徳授業私の実践

伝記教材を「比較」と「問い返し」で深める

はじめに

伝記教材は、扱いが難しいと言われることが多い。その理由として、「偉人の功績のスケールが大きいため、他人事になってしまふ」ことが挙げられる。「すごいことをした人の話」「自分たちとは違う」という印象を持ってしまい、問題意識を持ちにくくなってしまうのである。

しかし私は、偉人とは別の学習者に近い立場の人物を比較対象として設定し、それぞれを比較しながら学習を進

めれば、問題意識を持たせることができるのではないかと考えている。

また、問題意識を持たせる上でもう一つ重要なのが、発問と組み合わせを行う問い返しである。発問への学習者の答えに対して、問い返しを行うことによって、より問題意識を高めることができる。

これらを展開の中でうまく組み合わせれば、問題意識を持たせながら伝記教材を使った学習を進めることができる。と考え、教材「未来への裁判」の授業を構想した。

授業について

本実践は担任していない小学六年生の児童に対して飛び込み授業で行ったものである。

○**主題名** 共に生きるために

○**内容項目** 公正、公平、社会正義

○**教材名** 「未来への裁判」(『新版みんなの道徳6』学研)

○**ねらい** ルーアの生き方を通して、一人一人が正義の実現に努めることが、差別をなくすことにつながるのと理解し、差別や偏見を傍観するので

はなく、自分事として行動していきこうとする態度を養う。

また今回は、教材「カラフルな工夫」と組み合わせ、二教材で「共に生きる」がテーマのユニットとして学習を進めた。本実践は、そのユニットの一時間目に当たる実践である。

【導入】

はじめに、近年の差別やいじめについて報じた新聞記事を複数紹介した。自分たちが理想とする社会と現実とを比較して、社会に対しての問題意識を持たせると共に、「差別のない社会にするためには何を大切にしたらよいか」というめあてを設定した。

【展開】

教材範読後に感想を共有した。

T:..話を読んでどう感じた？

C:..差別とたたかい続けていてすごい。

C:..勇気を出してたたかっていたのがすごい。

C:..友人に「諦めたほうがいい」って言われていたのにたたかい続けるところがすごい。

これらの感想を基に「ルースはなぜ裁判をたたかい続けたのか?」という

問いを設定した。

その後、ルースの行動と、教材に登場する友人の行動を比較しながら、問

いについて考えていった。

T: ルースは何で「諦めたほうがいい」と言われてもたまたか継続したいんやろう？

C: 女性は無理っていうのを変えたかった。

C: 自分も差別されていたから。

C: ずっと差別が嫌だった。

C: ほかの人に自分と同じような嫌な思いをしてほしくなかった。

一見差別との向き合い方について考えているようではあるが、この段階では、児童はまだルースを「すごい人」としか捉えていない様子だった。

そこで、友人と比較する問い返しの発問を行う。

T: ルースの友人は差別をなくしたい、変えたいという思いはなかったのかな？

C: そんなことはない。

C: 友人も差別に反対だったと思う。

T: じゃあ差別をなくしたいという思いがあるのに何で「諦めたほうがいい」と言ったのかな？ その気

持ちは分かる？

C: 周りが全員その考えやったから無理やと思った。

C: どうせ負けるって思ってた。

C: もし裁判に負けたら責められると思った。

C: 周りからいろいろ言われそうで怖かったんやと思う。

T: その気持ちはルースにはなかったのかな？

C: あったと思う。

ここで、人には人間関係や周囲の雰囲気によって流されてしまう弱さがあること、その弱さは誰もが持ちうるもので、ルースも自分たちと同じ「一人の人間」であることが共有された。

そこで、もう一度「なぜ裁判をたまたか続けたのか」と発問を行った。

C: 怖さや不安もあったはずなのに、何でたまたか続けたんかな？

C: 相手の立場を考えたら放っておけなかった。

C: 自分がたまたかわないといじめが続く。

展開の最後に、ルースの裁判の話は、自分たちの身の回りのいじめや差別、偏見の話とは関係があるか考えた。

「たまたかわないとなくならないのは

同じ」「その人の立場になって考えることと、動くこと、どっちも大事」など、ほかの差別やいじめでも同じことが言えるという考えが出てきた。

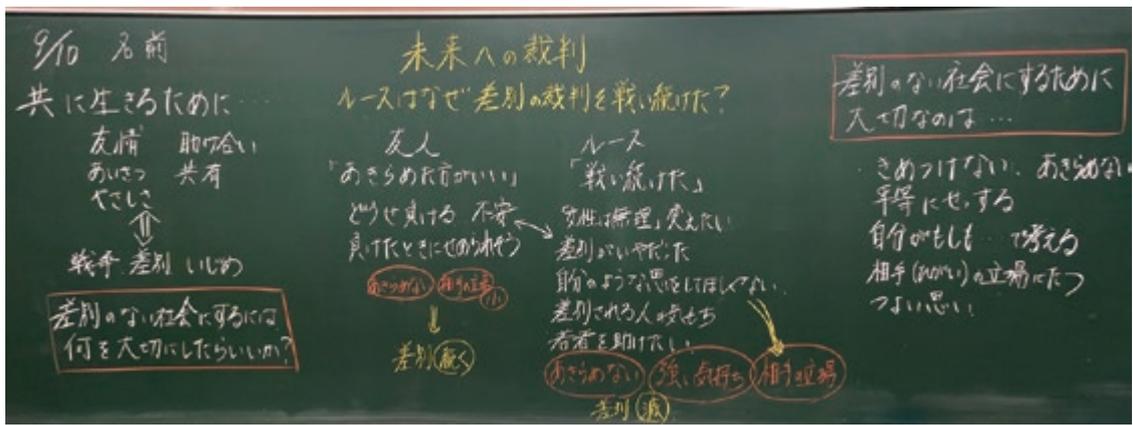
【終末】

最後に、めあてについて話し合い、感想を書いて授業を終えた。

終わりに

ルースの行動について問うた後、問い返しの発問を行った。その際、それまで下を向いていた児童も一斉に顔を上げた。おそらくこの瞬間に、児童の中に「問題意識」が芽生えたのではないかと考える。

その後、ルースの友人に対する共感を問うた際は、児童は友人に自分を重ねながら考えていた。ここで「そんな経験ある？」とさらに問うてもよかつたかもしれない。だが一連のやり取りの中で、「ルースも自分たちと同じ人間だ」と共有されたことで、ルースの行動について再度考えた際、児童たちが一層真剣に考える様子が見られた。児童の考えが深まる授業となった。



(たかぎのぶとし)

道徳授業私の実践

本音を引き出し、対話で深める授業

ICT活用のメリットによって



岩手県盛岡市立
下橋中学校教諭

内藤大輔

はじめに

私は、道徳の授業においてもICTの活用が有効であると感じています。それは、ICTを活用することによって、きれいな事ではなく本音に近い生徒の思いを引き出すことができるようになるからです。その効果を生むICT活用のメリットは大きく二つあります。

②教師側が生徒の考えを見取り、文章に表れていない深い部分まで追求しやすいこと。

本稿では、この二つのメリットを生かして取り組んだ授業実践について紹介します。

授業の概要

○**主題名** 盛岡の誇り

○**内容項目** 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

○**教材名** 「ぼくらのプライド」(C)岩手県道徳教育郷土教材集『ふるさと』

わたの心 中学校編

○**ねらい** 地域社会の一員としての自覚を持って、郷土を誇りに思い、進んで地域に貢献しようとする心情を育てる。

○**教材内容** さんさ踊りの季節がやってきた。母親は職場のさんさ踊りの練習で帰りが遅くなり、街は騒がしくなる。地元に住む中学生の「ぼく」は、さんさ踊りも、中学生が行う翌日の清掃活動も快く思っていない。そんな主人公が、人々の練習風景や母の踊る姿、観光客の喜ぶ姿を目にし、心揺さぶられる。

○授業で意識した点

・本校での出来事が元になって作成された「ふるさと教材」を用いることで、身近な問題として捉えさせました。

・ねらいとする方向へ価値づけるために事前アンケートを行い、ICT機器を活用して、集計作業の簡素化を図りました。

・生徒に思考させる場面でICT機器を活用し、直感的な思いを出させ、それを基に交流しました。

・考えを発表する場面では、記述したものを読むのではなく、教師側が追求したい部分に迫るように発言をするよう促しました。

・終末場面では、価値に迫ることができるといった説話をういました。

ICT活用場面

【①直感的な操作により、生徒の素直な考えを引き出し、交流した場面】
主人公の気持ちに対する考えを発問とした際、「共感できる」気持ちと「共感できない」気持ちについて、それぞれどの程度感じているかを割合で

示させました。

タブレット端末には、「共感できる」(青)と「共感できない」(赤)の割合を、指で容易に変更できる簡単なシートを送信し、直感的に回答させました。

そして、それを基に考えを交流しました。

T: 全体を見ると、「共感できる」の割合がだいぶ多いですね。理由を話してもらえますか？

C: 自分も「なんで自分たちがやらな」といいけないのか」と思ったことがありました。

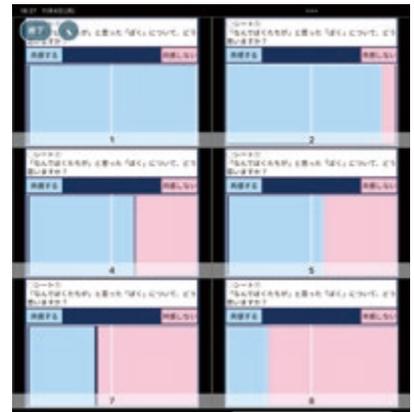
C: 中学生じゃなくても、さんさ踊りに参加した人がやるべきだと思います。

C: 朝がとて早いので、起きるのが大変だからです。

T: 一方で、「共感できない」の割合が多い人や、かなり迷った人もいます。

C: やっぱ地元祭りの祭りだから、やらなきゃいけないという気持ちもあります。

C: 実際、自分もさんさ踊りは楽しんでるわけだし。



【②教師が生徒の考えを見取り、文章に表れていない深い部分まで追求した場面】

中心発問では、「ほくらのプライド」と言って張り切って清掃活動に臨む「ほく」について、なぜ心が変わったと思うかを生徒に問いました。生徒は、タブレットに送信されたシートに記述した後、お互いの考えを交流しました。

発表させる際には、シートの記述をそのまま読むのではなく、文章に表れていない部分まで追求することを意識させるよう補助発問を行いました。生徒は黒板に映し出されているシートを見ながら、そこに表れていない部分についても考えながら聞くことができます。

T: Aさんは、「プライド」というものが少しわかった」と書いています。が、どんなものかと思ったのでしょうか？

C: 自分たちが頑張るだけではなく、ほかの人に見て喜んでもらうことに価値がある……みたいなの。

T: BさんやCさんもプライドに触れて書いていますね。「プライドを持つかっこよさ」や「盛岡市民のプライド」という言葉で。

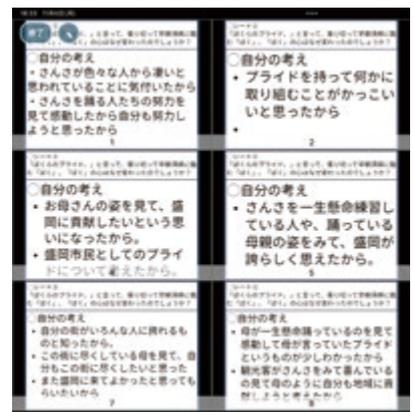
C: 自分が踊りに参加していなくても、その地域の一人というだけで誇らしい気持ちになったのかなと思います。

T: 地域の一人であることを感じたのですね。それがDさんの言う「自分もこの街に尽くしたい」という気持ちにつながったのですかね。

C: どうしてそのように考えたのですか？

C: さんさ踊りを見て喜んでる観光客の姿から、自分にも何かできることはないか考えたと思います。

それが、主人公が清掃活動を頑張ることにつながったのだと思います。



おわりに

本稿では、道徳の授業におけるICT活用の有効性について、二つのメリットに絞って述べてきました。私は、タブレットも学習ツールの一つであり、有効な場面では積極的に活用していくべきだと考えています。

ICTを活用することは、生徒が素直な気持ちで話ができ、さまざまなお互いに触れ、自分の考えを広げたり深めたりすることにつながると実感しています。今後も多くの可能性に挑戦し、生徒にとってよりよい道徳の授業づくりに取り組んでいきたいと考えています。

(ないとう だいすけ)

浅見先生に 相談です!

第2回



十文字学園女子大学教授

「考え、議論する」道徳とは？

議論が盛り上がっても、ねらいに迫れていないことがあります。

浅見哲也



マンガ・春原弥生



道徳の授業を行う前には、その流れを考えておくことが必要です。授業の流れのことを「学習指導過程」と言います。授業のねらいを達成するために、どのような順序で指導していくのか、道徳の授業の一単位時間の流れを確認してみましょう。

道徳の授業の流れは「導入」「展開」「終末」という三つの段階に分けて構成することが広く行われています。「導入」は、授業で活用する教材について子どもたちの興味や関心を高めたり、この授業で学ぶ道徳的価値に関して、子どもたちの日常生活から問題意識を持てるようにしたりするための動機づけを図る段階です。

続いて「展開」は、ねらいとする道徳的価値のよさや大切さを実感し、自分自身を見つめ、これからの生活や生き方に生かしていけるようにするための中心的な段階です。教材の登場人物に自分を重ねながら考えを持ち、みんなと話し合い、道徳的価値を自分のものにしていきます。

最後に「終末」は、子どもたちが授業で考えたことや新たに気付いたことなどを心に深くとどめ、これからの生き方に生かしていこうとする意欲を高める段階です。こうした段階の役割を理解して授業を構想することが、道徳の一般的な学習指導過程として定着しています。

道徳の授業の流れをつくる

「考え、議論する道徳」とは？

「考え、議論する」という言葉の印象から、白熱した議論を交わし、相手を論破するような学習を想像した人がいるのではないでしょうか。この言葉は、教科化前の道徳の授業が、登場人物の気持ちを讀み取るだけのものになってしまおうという課題の改善、授業の質的転換を図るために打ち出されたものです。では、実際にどのような授業が求められているのでしょうか。それは、道徳科の目標の中に示されている次のような学習になります。

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習

道徳科の目標である道徳性を養うためには、自身を見つめ、他者の多様な考えに触れながら話し合い、よりよい生き方を模索していくような学習が求められています。このような学習をより印象的に打ち出した言葉が「考え、議論する道徳」であると言えます。

「考え、議論する」わけですから、特に授業のどこでしっかりと話し合うのかを考えておくことが必要です。道徳の単位の時間の授業は、川の流れのよう

に、ただ淡々と流れていくものではありません。前述した一般的な授業の流れである「導入」「展開」「終末」それぞれに重要な働きがありますが、主に「展開」の段階で教材を活用し、子どもたちは登場人物に自分を重ねながら考えていきます。その中でも特に時間をかけて話し合うべきところで議論できると、子どもたちはその授業のねらいとする道徳的価値を自分のものにする事ができるのです。話し合いのきっかけをつくるのは教師の発問であり、その発問を「中心的な発問」と言います。

一般的には、前号で触れた人間理解⇩他者理解⇩価値理解という流れを追って、自他の多様な価値観に触れ、自分の心にある道徳性を養っていくのです。では、「考え、議論する」中心的な発問はどのあたりになるのでしょうか。そもそも中心的な発問については、『小・中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』においても「授業のねらいに深く関わる」と示されているだけで、はっきりとした定義はありません。そこで授業者である教師が、その授業の手掛かりとする内容項目や子どもの実態、教材の特徴を生かしながら、どこで川の流れをせき止めて、時間をかけて話し合うのかを決めることで「考え、議論する道徳」が実現するのです。

「他者理解」と「価値理解」の間にタメをつくる

「川の流れをせき止める」という表現を言い換え

れば、道徳の授業の学習指導過程にタメをつくるということになります。大事なところに時間をかけて話し合うことに変わりはありません。では、どんなところにタメをつくるとよいのでしょうか。これも教師の判断に任せられます。前述した他者理解でタメをつくったり、価値理解でタメをつくったりする授業が多く見受けられます。

ここからは私見になりますが、それぞれの理解は、教材のある場面を取り上げて、そのときの登場人物に自分を重ねて気持ちや考えを問う発問によって得られるものです。しかしこれでは、主に多様な価値観に気付く他者理解から、道徳的価値のよさや大切さに気付く価値理解へと急に飛び過ぎる気がしています。

「正直、誠実」という内容項目で例えるならば、他者理解の発問によって子どもたちは、正直に言う、言わないという多様な価値観を表現し、価値理解の発問によって、正直に打ち明けることよさに触れる、これでは急展開過ぎると思うのです。このように考えると、タメをつくる場所は、他者理解と価値理解の間あたりかもしれません。このあたりに人の心がよりよい方向に向かっていく大切な心の働きが見えてくるのではないのでしょうか。

いずれにしても、教師の意図に基づく授業のタメをつくり、「考え、議論する道徳」にチャレンジしてみたいと思います。

（あさみ てつや）

どうなるこれからの道徳授業

連載26回 板書の工夫編

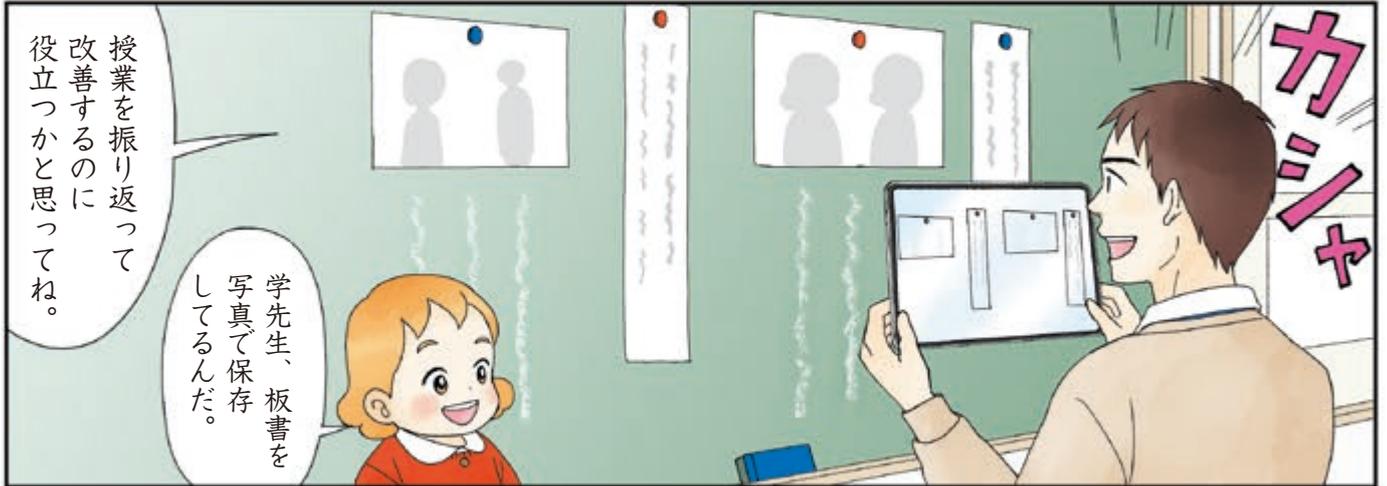
とくちゃん



監修・廣瀬仁郎 法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ



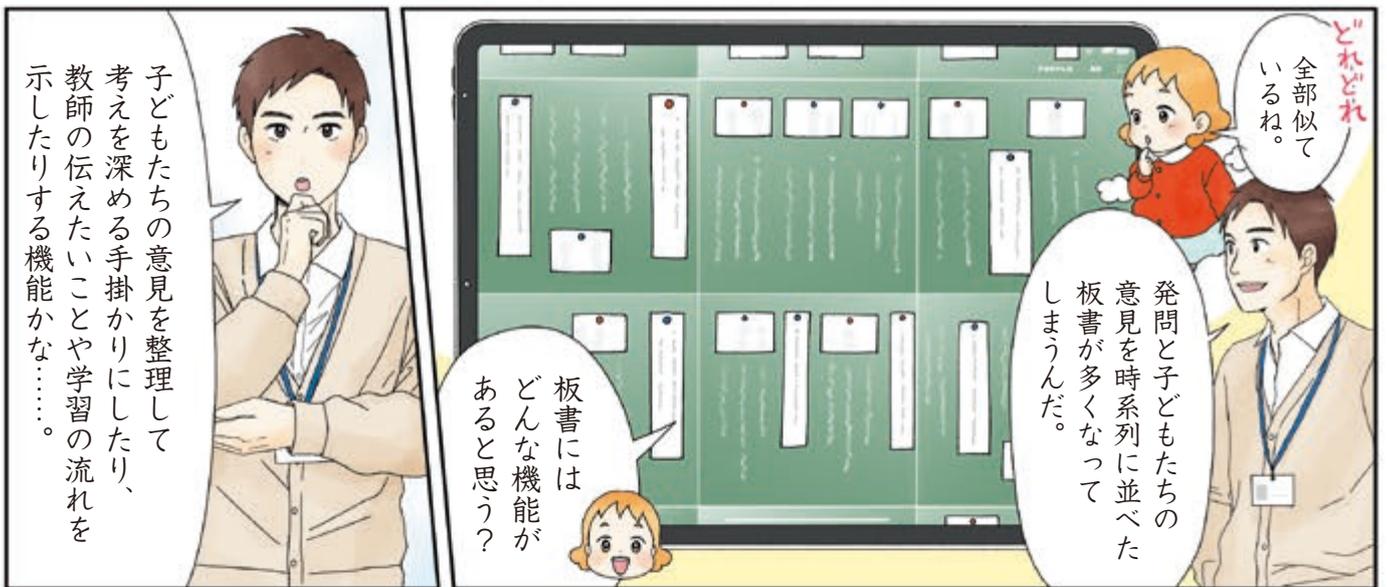
先生



授業を振り返って
改善するのに
役立つかと思ってね。

学先生、板書を
写真で保存
してるんだ。

カシヤ



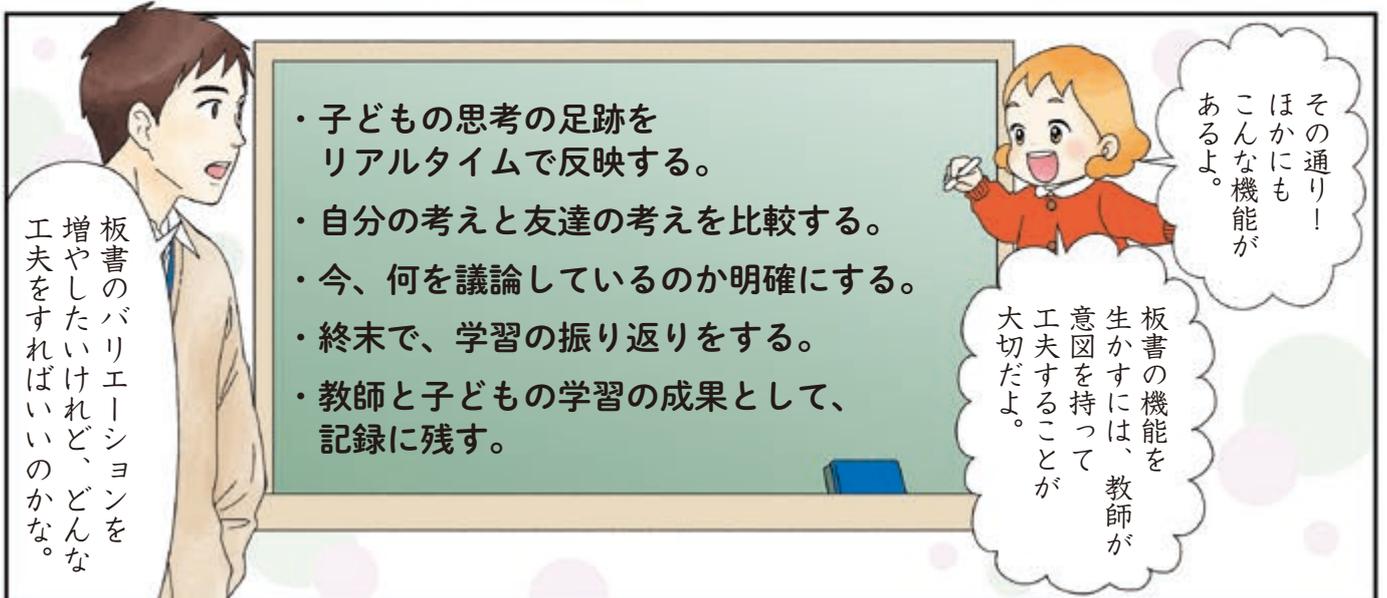
全部似て
いるね。

どれどれ

発問と子どもたちの
意見を時系列に並べた
板書が多くなって
しまった。

板書には
どんな機能が
あると思う？

子どもたちの意見を整理して
考えを深める手掛かりにしたり、
教師の伝えたいことや学習の流れを
示したりする機能かな……。



- ・ 子どもの思考の足跡をリアルタイムで反映する。
- ・ 自分の考えと友達の考えを比較する。
- ・ 今、何を議論しているのか明確にする。
- ・ 終末で、学習の振り返りをする。
- ・ 教師と子どもの学習の成果として、記録に残す。

その通り！
ほかにも
こんな機能が
あるよ。

板書の機能を
生かすには、教師が
意図を持って
工夫することが
大切だよ。

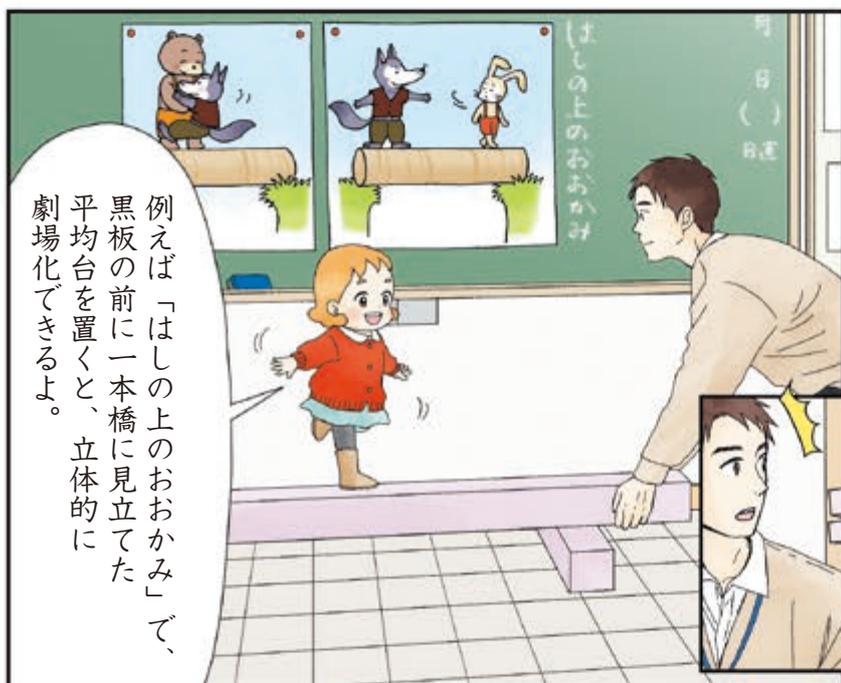
板書のバリエーションを
増やしたいけれど、どんな
工夫をすればいいのかな。

● 場面絵や登場人物の絵（顔絵）の活用

登場人物の思いや考えを話し合うときに、場面絵や顔絵をはるとイメージが湧くよ。

場面の变化に合わせて顔絵を移動させると、今どの場面のことを考えているか分かりやすいね。

顔絵の表情に縛られずに考えさせたいときは、シルエットを使って表情を想像させる方法もあるんだ。



例えば「はしの上のおおかみ」で、黒板の前に一本橋に見立てた平均台を置くと、立体的に劇場化できるよ。

● 劇場化や動的な板書

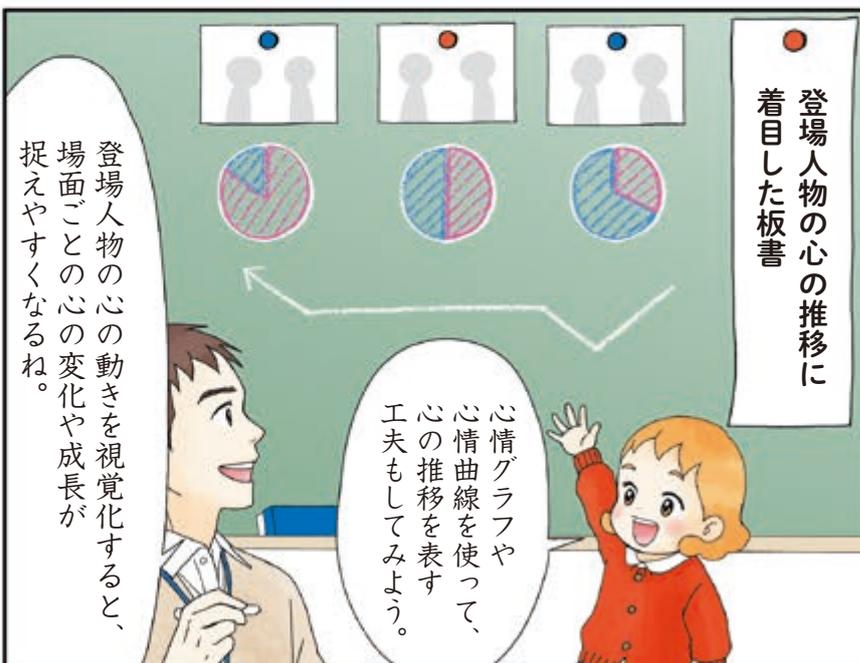
黒板全体を教材の世界に見立てて舞台化したり、ペープサートを取り入れたりすると、臨場感を持って登場人物に自我関与できるよ。

学先生、運ぶの手伝って！



時系列じゃない方法で分かりやすく整理するにはどうすればいいのかな。

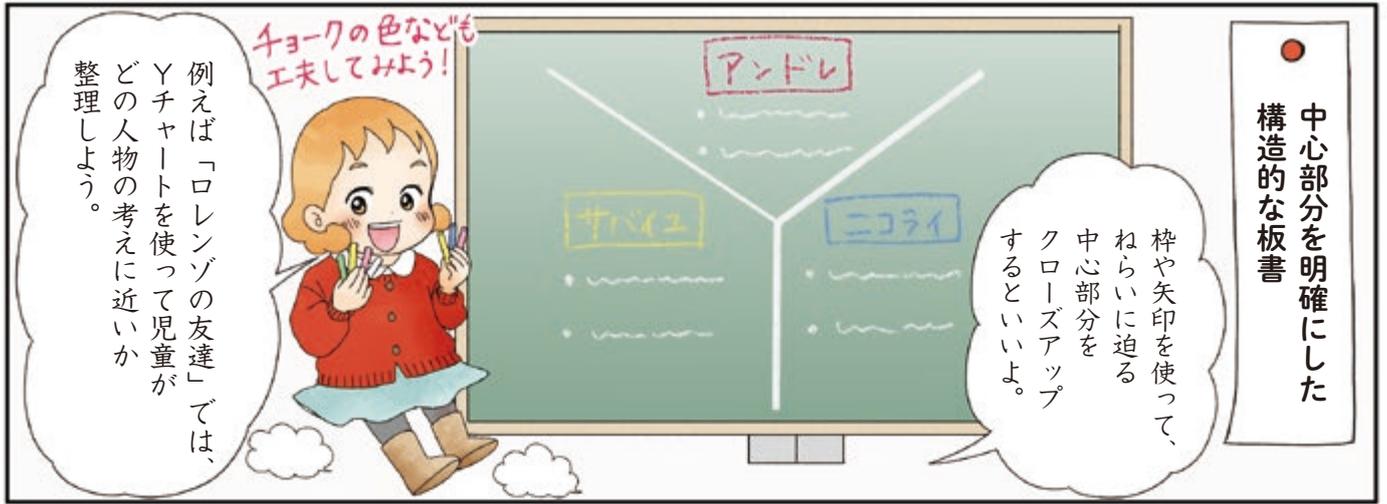
よく「構造的な板書」って聞くけど……。



● 登場人物の心の推移に着目した板書

心情グラフや心情曲線を使って、心の推移を表す工夫してみよう。

登場人物の心の動きを視覚化すると、場面ごとの心の変化や成長が捉えやすくなるね。



● 中心部分を明確にした構造的な板書

枠や矢印を使って、ねらいに迫る中心部分をクローズアップするといいよ。



ネームプレート以外に、意見を書き込んだふせんをはり付けてもいいね。

子どもたちに、自分と考えが近い人物の所にネームプレートを貼ってもらうのはどうかな?



黒板ってずっと昔からあるけれど、いろいろな使い方ができるんだね。

板書を活用して子どもたちと交流できるようにしよう。

道徳ジャーナル124号 令和7年2月発行

発行所 株式会社Gakken 発行人 木村昌弘 編集人 麻生征宏

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/> ●「道徳ジャーナル」のPDF版はWEBページから。

9300009614

『道徳ジャーナル』読者アンケートにご協力ください

よりよい紙面づくりのため、『道徳ジャーナル』へのご意見やご感想、道徳に関する悩みや疑問をお聞かせください。



◀左のQRコードからアンケートにご回答いただけます。